

最新鋭設備を導入し 機能性フィルム事業を一気に加速

OA機器のインクリボンで国内トップシェアを持つなど、印字・印画に関する高い技術を誇るフジコピアン。近年は新事業として工業材料の機能性フィルムを手掛け、ここにきて新たな生産設備を稼働させて開発環境や生産体制を強化。製品ブランドも「FIXFILM®」に統一して、一気に事業を加速しようとしている。その戦略と展望を、赤城貫太郎社長に聞いた。

フジコピアン

代表取締役社長 **赤城 貫太郎氏**

——機能性フィルムという新事業に至るまでの経緯をお教えてください。

赤城 当社は1950年に伝票などの複写に使う「カーボン紙」からスタートし、タイプライター用の「フィルムリボン」、ドットインパクトプリンター用の「ファブリックリボン」、そしてワープロ用やバーコード印刷向けの「熱転写リボン」と、それぞれの時代に合わせてさまざまな印字媒体を開発して世の中に送り出してきました。その後に開発した書き損じをきれいに直せる「修正テープ」は、2004年頃から急速に普及して、今では世界シェアは70%超、国内では80%を超えています。

薄膜や剥離の技術を基に 機能性フィルムへと進出

こうした印字媒体で培った分散と塗工技術が背景にあって、工業材料としての機能性フィルムへと進出したのです。

開発した機能性フィルムは、糊を使わずに滑らかな表面に自己吸着して、しかも糊が残らずにきれいに剥がせて何度でも使えるという性質を持ちます。そこで、半導体ウエハの研磨や液晶モニターの製造工程で使う保護用フィルムをはじめ、広告ポスターを建物などに貼るのにも利用されました。

その後、タッチパネル用の機能性フィ

ルムとしてお客様の要望に応える形で、ほかの機能を加えた機能性フィルムを開発していったのです。

——具体的には、どのような製品がありますか。

赤城 表面がハードコート加工されキズがつかないものや、指紋が付きにくく付いても簡単に拭き取れるもの、反射を抑えて画像が鮮明に見えるもの、そして抗菌剤を配合したものなどがあります。技術の組み合わせによって特性が異なるさまざまなフィルムが作れますが、提供する製品数を20種弱に絞り込み、製品シリーズ名は「FIXFILM®」ブランドに統一しました。その売り上げは2011年には10億円超となり、徐々に事業の柱になりつつあります。

最新鋭の生産設備を導入して 生産力と開発環境を大幅強化

——2011年には、新たな設備投資をされました。

赤城 岡山県にある工場に約14億円をかけて、クリーンな環境で高精度な塗工液の製造と塗工ができる最新鋭の設備を導入しました。3号機と呼んでいますが、従来の1、2号機の3倍の生産能力を持ち、高い生産性とともに、より幅広い製品に対応できます。すでに11月15日に量産稼働を開始しています。



写真1 ●新ラインを導入した岡山工場



写真2 ●岡山工場に導入した新規設備

現在、新規事業展開の一環として、伸びが著しいディスプレイや電子材料、エネルギー分野について大手メーカーとの共同開発を進めていますが、こうした開発環境も新たな設備によって大幅に強化できました。また、顧客からの開発要望に応じた機能性フィルムの試作・量産化などにも対応が可能になりました。

——御社の強みはどこにありますか。

赤城 フィルムに塗る塗工液の配合や高分散といった化学技術と、薄膜や精密塗工という生産技術、そして、それを支えるスタッフと最新鋭の工場です。特に、非常に薄いフィルムに塗る技術では、世界トップクラスの開発力と製造ノウハウがあります。

印字媒体のフィルムは、塗ったインクなどを衝撃や熱によって剥離させ、さらに紙などにきれいに付くようにする必要がありますので技術的に非常に難しいのです。その点、表面にくっつける機能性フィルムは、技術的には印字媒体のフィルムよりもやさしい面があります。

——では、グローバル戦略についてはいかがですか。

赤城 海外での事業展開は、販売戦略としてグローバル化を進めています。しかし、海外での生産戦略としては慎重に取り組んでいます。成熟した製品については海外工場での生産を進めていますが、機能性フィルムなど新製品の海外生産については基幹技術が模倣されるリスクを持っているので慎重に考えています。

工場のラインで使ってもらえる 工業材料としてのフィルムに特化

——2012年は、特にどんなところに力を入れていきますか。

赤城 現在、大きく伸びているスマートフォンに代表される携帯端末用のタッチパネル向けに、2012年の1年間は集中していきたいと思います。さらに中長期的には、工場のラインなどで使ってもらえる工業材料としての機能性フィルムを目指して開発・量産していきます。機能性フィルムには、とにかくさまざまな性質を持たせることが可能です。例えば、電磁波を遮断させたり、導電性を持たせたものもできます。今は基板もフィルム・パターンになってきてい

ますし、その用途の多彩なフィルムが作れます。そのほかには、リチウムイオン電池について、正極や負極を塗る技術などで次世代製品の開発をメーカーと一緒にやっているところです。

——工業材料としての機能性フィルムが中心になるわけですね。

赤城 その通りです。もちろん、時がたつにつれて対象となる製品はどんどん変わっていくと思います。例えば、スマートフォンも音声入力になればタッチする必要はなくなりますが、画面は残りますので反射防止フィルムを提供するなど、柔軟に対応していくことになると思います。

また、今は機能性フィルムですが、将来はフィルムでなくなるかもしれません。そういったものが市場に登場してきてから開発するのでは間に合いませんので、常に“次のもの”を念頭に、グループで常に新しいアイデアを探しています。頭を軟らかくして、どんどん変革についていきたいと考えています。技術力と行動力でお客様の満足を得て国際社会に貢献する“技術のフジコピアン”にご期待ください。



Kantaro Akashiro